

井上光晴『明日——一九四五年八月八日・長崎』は、 いまもなお『明日』たりえているのか？

川口隆行

一 はじめに

広島の地元紙である『中国新聞』には「平和」欄が設けられており、二〇二四年現在、若者向けの読書案内【A Book for Peace 森田裕美 この一冊】が連載されている。次は、そこに掲載された井上光晴『明日——一九四五年八月八日・長崎』（以下『明日』と略す）についての記事である。少し長くなるが、全文引用する。

本書のタイトルが示す「明日」がいかなる日か。副題の「一九四五年八月八日・長崎」に、過去を知る私たちはピンとくる。米国が広島に続いて長崎にも原爆を投下し、あまたの命を奪い去った日である。

本書は、核や差別など人間社会が抱える問題を問い続けた作家井上光晴（一九二六〜九二年）が一九八二年、世に送り出した小説だ。原爆さく裂の瞬間も被爆の惨状も描かれない。前日の市井の日常をつぶさに描くことでそれを破壊した原爆の非人道性を告発する。

物語の軸は、この日催された徴用工員の庄治と看護師ヤエの結婚式。戦況悪化で物資も乏しい中、何とか調えた祝宴にも申し開きが必要な時世だ。新郎新婦、家族、友人たち列席した人々の背景が、時代の空気とともに順に明かされていく。ヤエの同僚亜矢は子を身ごもるが、相手と音信不通で悩んでいる。叔母ハルは、役所の権力争いに巻き込まれ浦上刑務支所に収監された夫の身を案じる。庄治の友人継夫は世話になった看護師にひそかな思いを寄せ…。

それぞれの物語には戦争が暗い影を落とすものの、見えてくるのは今と変わらぬ人間の感情や日常だ。

最終章が描くのは、九日の明け方。ヤエの姉ツル子に赤ちゃんが誕生し、こんな一文で幕を閉じる。〈夜は終り、新しい夏の一日がいま幕を上げようとして、雀たちの囀りを促す〉翌日のかの地を知るだけに、希望に満ちた言葉に胸が締めつけられる。できることなら原爆搭載機を止めに行きたくなる。

核が存在し続ける世界で、井上が警鐘を鳴らした「明日」は、現代の明日に通ずることをあらためて肝に銘じる⁽¹⁾。

簡にして要を得た内容であるが、だからこそ、現在『明日』を再読するための論点もまた集約されている文章とも言えるだろう。以下、この新聞記事を導き手として、三点に絞って問題提起を述べたい。

二 問題提起①

原爆を直接描かない『明日』が、「原爆文学」として機能する条件として、東西冷戦の核戦争の危機、チェルノブイリ原発事故という一九八〇年代の社会的文脈（この場合「大きな物語」と言い変えてもよい）があったのではないのか。

前述の新聞記事が記すように、『明日』というテキストには、「原爆さく裂の瞬間も被爆の惨状も描かれない」。確かに、「前日

の市井の日常をつぶさに描くことでそれを破壊した原爆の非人道的性を告発」しているのだとも言えそうだが、その前に、『明日』が誕生し、受容された一九八〇年代という時代について、やはり確認しておく必要があるだろう。

一九八〇年代前半は、米ソの核開発がエスカレート、全面核戦争の危機が叫ばれていた時代であった。例えば、一九八一年にはレーガン米大統領の「ヨーロッパ限定核戦争」発言（二〇月）を受けて、ヨーロッパでは中距離核ミサイル配備に反対する大規模デモが起っていた。

日本でも有名な「核戦争の危機を訴える文学者の声明」（二二月。翌年四月には、岩波ブックレットの第一号として刊行）が発表されている。『明日』の雑誌発表は一九八二年一月のことであり、同年五月に単行本が刊行されている。一九八三年八月には、「原爆文学」を語る上で欠かせない『日本の原爆文学』全一五巻（ほるぶ社）から刊行され、「手の家」「地の群れ」「プルトニウムの秋」などとともに、『明日』もまた井上光晴のテキストを集めた第五巻に収録されている。また、同年の第二九回青少年読書感想文全国コンクール・高校の部の課題図書に選定されている（ちなみに、小学校低学年の部には、あまんきみこ・作 上野紀子・絵『ちいちゃんのかげおくり』が選定されている）。

そして、一九八六年四月には、ソ連でチェルノブイリ原発事故が起るのだが、『明日』が集英社から文庫化されたのはその三ヶ月後の七月のことであり、二年後の一九八八年八月には、黒木和雄・監督、脚本「TOMORROW 明日」封切られている。

『明日』が、「八月九日」を語らずとも「原爆文学」として広

く読まれ、アダプテーション化されたのは、こうした時代背景があったのは間違いないだろう。読者は、「八月八日」の光景に現在を重ねて、さらには「八月九日」についての既有知識を、近い将来に到来するかもしれない破局のイメージへと動員していったのであろう。

二〇一四年の現在、核の危機が去ったわけではない。むしろ、核兵器の使用は益々現実味を帯びてるとさえ言えるかもしれない。しかしながら、冷戦の時代において中心に据えられた戦略核から、「使える」小型戦術核へと核兵器をめぐる問題も変化している。テクノロジーの革新と相まって、総力戦体制のイメージの延長にあった全面戦争の枠組に収まらない地域紛争や内戦など戦争の形態も複雑化している。一九八〇年代と同様に、『明日』を、「原爆文学」として読むことは可能なのだろうか。

三 問題提起②

赤ん坊の誕生という「希望」、描かれぬがゆえに際限なく増幅する原爆の「非人道性」というイメージの落差によって駆動する悲劇のドラマツルギーを手放しに評価することは、核の特権化という事態に手を貸すことにはならないのか。

やはり新聞記事が述べるように、この小説のラストは大変印象的である。「最終章が描くのは、九日の明け方。ヤエの姉ツル子に赤ちゃんが誕生し、こんな一文で幕を閉じる。〈夜は終り、新しい夏の一日がいま幕を上げようとして、雀たちの囀りを促す〉」。

ほかにもヤエの同僚の妊娠というエピソードが登場するように、結婚、妊娠、出産という出来事がテクストの主要な箇所配置されている。『明日』は、新しい生命の息吹を象徴的に提示しつつ、この「希望」を破壊する原爆の恐ろしさを対置させる。そればかりか、原爆投下以降の話が直接には語られないために、場合によっては、読者の内で、原爆の「非人道性」のイメージはともどもなく膨らんでいくことになるだろう。これこそが、読後の印象を強くする最大の仕掛けであって、その点においてこの作品は成功している。

しかしながら、こうしたテクストの戦略は、「核のイメージ」の特権化という事態に近づくことにならないのだろうか。ここで思い出したのは、フリーダ・フライバーグが『AKIRA』（一九八二年〜一九九〇年連載、一九八六年アニメ化）に描かれた核戦争のイメージを分析するのに、フランシス・ファーガソンの「核の崇高」概念をかつて援用していた点である^②。フライバーグのファーガソン理解を簡単に説明すれば、近代ヨーロッパにおいて生まれた「崇高」概念は、男性主体が家庭や生殖という日常世界に閉じ込められる恐怖に由来し、現代における核の災厄のイメージはそうした「崇高」の美意識の改定版と説明される。核のカタストロフィーは忌まわしい未来であるとともに、現在の日常を超えた外部へのあこがれが投影されるという。

崇高の美学で避けられているのは、主として生殖の世界である。崇高は次のように主張する——美とは女性や子どももの庇護を受けた社交の世界にはかならない。自らの死の可能性

との英雄的な遭遇を探究することがより気高いのであり、その中で崇高が常に避けてきたのは、生殖の世界における習慣や風習、親密さなのだ、と^③。

作者の狙いや読者の思いはそこにはないとしても、誕生したばかりの赤ん坊の死を契機とした想像力を前提とすることにおいて、『明日』は、このような「核の崇高」と言う問題と適切な批評的距離を取り得ていると言えるのだろうか。『明日』に描かれるほかの結婚、妊娠、出産の描写の詳細な検討も必要になるだろう。また、フライバーグが論じた『AKIRA』を始めとした、核戦争とその後の世界を扱った一九八〇年代に生産された膨大な大衆文化との関係から『明日』を考えることも必要であろう。

四 問題提起③

「八月九日」を描かない『明日』は、読者が原爆投下に関する既有知識を前提とするが、発表から四〇年以上経過し、広島・長崎への原爆投下から八〇年を迎えようとする今日、そもそもそれは自明なのか。

新聞記事には、「翌日のかの地を知るだけに、希望に満ちた言葉に胸が締めつけられる」とある。たしかにそうかもしれない。だが、根本的な問題として、現在の読者（この場合の読者とは、日本語が読めるものだけでなく、様々な世代や地域の人々を想定している）は、「一九四五年八月九日の長崎」の何をどのように「知

って」いると言えるのか。長崎に原子爆弾なるものが落とされ、街が破壊され、多くの人が傷つき、亡くなった程度のこととは、それなりに多くの人は「知って」いるのかもしれない。だが、それは本当に「翌日のかの地を知」っていると言ってよいのだろうか。広島・長崎の被爆体験者は高齢化が進み、社会からの退場は不可避であるばかりか、いよいよ加速度的に進んでいる。体験の継承が盛んに唱えられているが、様々な困難にも直面している。前の二つの問題提起とも繋がるのだが、原爆を直接描かない「原爆文学」として、『明日』というテキストが機能する条件は、今日さほど当たり前のことではないのかもしれない。

すでに、私たちは、近い将来において、いま当然とみなしている原爆投下の歴史や知識が無効化される事態が招来する可能性を示唆する幾つかのテキストを知っている。例えば、原爆投下一〇〇年を祝って広島に再び原爆を落とす、ブライアン・W・オールデイス「リトルボーイ再び」（一九六六年発表、一九七〇年邦訳、ガードナー・R・ドソワ編『海の鎖』国書刊行会、二〇二二年収録）、「原爆投下捏造説」や「核兵器非人道説」が語られる二〇三〇年代を描いた山本弘「リトルガールふたたび」（二〇〇九年発表、同『アリスへの決別』二〇一〇年収録、コレクション『戦争×文学』第五巻【イマジネーションの戦争】集英社、二〇一一年収録）などがそうであるが、『明日』はこうしたテキストが示す未来への想像力に拮抗しえるだろうか。

『明日』が、いまなお「明日」たりえんとするならば、テキストが描く現在（一九四五年八月八日）にいかなる問題領域を発見し、二〇二〇年代を生きる私たちのいかなる今日的な問題領域と、

つきあわせ対話することができるとはかかっている。そしてそうしたことを考えるとき、なぜ、いま、再読する井上作品が『地の群れ』や『西海原子力発電所』ではなく、『明日』だったのか、という問いもあえて投げかけておきたい。

注

1 森田裕美 「明日 一九四五年八月八日・長崎」 井上光晴著(集英社文庫) … 前日の営み、非人道性告発」 『中国新聞』二〇二四年七月二十九日。

2 フリーダ・フライバーグ 『AKIRA』——核戦争以後の核の崇高」 ミック・ブロデリック編『ヒバクシャ・シネマ——日本映画における広島・長崎と核のイメージ』現代書館、一九九九年。

3 France Ferguson, *The Nuclear Sublime, Diacritics*, Summer 1984 P.6 (ただし、引用は注2の九三頁による。)